大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

ぷらっとシネマ　戦争映画の意味を考えたいけれど『ジョニー・マッド・ドッグ』（J=S・ソヴェール監督）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 萩原, 弘子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/15429

ぷらっとシネマ　萩原弘子

戦争映画の意味を考えたいけれど

ジョニー・マッド・ドッグ（J＝S・ソヴェール監督）

内戦の続く西アフリカの某国、子ども兵士10数人の一団が村を襲撃する。「不死身」と名乗る青年大将が率いる自称「死の商人」部隊だ。襲撃の目的は、政府派の抹殺と子ども兵士集めである。目の前で父を殺されて震えあがる少年を、力ずくで連れ去る。最初は恐怖におののいていても、使える一兵卒になるのに時間はかからない。

冷酷無情の部隊長ジョニー・マッド・ドッグが兵士になった経緯も似たようなものだった。部隊に入って5年、現在おそらく15歳くらい。家族はなく、学校にも行っていない。部隊は、「不死身」に言われるまま、政府派を憎悪し、その転覆をめざして闘っていることになっている。現実は非武装市民を相手にモノ盗り、強姦、虐殺の毎日だ。

長期の政情不安と断続的な内戦で、子どもの成長を支える社会システムは崩壊している。マッド・ドッグたちの多くが読み書きはできず、欲しいモノは銃で脅して入手し、気に入らなければ殺し、性は強姦しか知らない。それでもマッド・ドッグの胸の片隅には柔らかい部分があって、強姦と愛の違いを知りたいと思うようにもなる。

ある日、政権の転覆が成功する。「不死身」が新政府軍の一員となって、子ども兵士たちはただ放りだされてしまう。もっとも、新体制もいつまで続くかわからない。マッド・ドッグの柔らかい部分が育つような未来はいつ来るだろうか。

銃声と怒号、威嚇と不信、そして血まみれの死体――戦争映画の定番シーンはそろっている。本作のように、最後に平和が訪れるわけではない戦争映画の意味とは、何だろうか。戦争の不毛、死の無意味、それらの責任を子どもに負わせることの犯罪性――そんな一般的な教訓の無力は、すでに誰もが知っている。

本作は時と場所を特定していないものの、実際には1980年代末からのリベリア内戦の現実を踏まえている。リベリアは、アメリカが南北戦争後に解放奴隷を入植させるためにつくった国だ。その国名は「自由（liberty）」に由来する。西アフリカに「自由の帝国」の拠点を築くのが、19世紀アメリカの計画だった。それ以来、入植アメリカ黒人と現地アフリカ人のあいだの確執が政争、内紛のタネになってきた。

アメリカ系黒人の優位を覆して現地人のドウが大統領になったのが1986年。その直後からアメリカ系黒人の政党が巻き返しをはかり、対立は内戦に発展した。アメリカから闇の武器供与もあったとされる。当時からどの陣営にも子ども兵士がいると指摘されたが、本作が描くのは、おそらく1996年にアメリカ系黒人テーラーが政権を奪還した後の内戦だ。マッド・ドッグたちは反テーラー陣営の子ども兵士だろう。たとえば、マッド・ドッグがアメリカ系黒人の家に押し入り、豊かな暮らしぶりを見て怒りを爆発させる場面がある。リベリアの状況を知らない観客には、彼は欲望むき出しの野蛮な餓鬼としか見えないだろう。しかしこれは、彼の怒りが、野蛮や無知に発するものではなく、リベリア社会の歴史ある矛盾に根差していることの表現である。

マッド・ドッグ役の少年を含めて、出演者には実際にリベリアで子ども兵士だった者がいる。そしてエンドロールの背景にも、現実の子ども兵士を撮影した数十枚のスチール写真が使われている。犠牲者でありながら、おそらく殺戮者でもある彼らの、激しかったり、優しかったりの表情に、あらためて戦争映画の意味を考えさせられる。

しかしフランス人写真家P・ロベールによる最後の一枚を見て、落胆の溜息が出てしまった。リベリアの難民キャンプを護衛する兵士の後ろ姿を捉えた写真だ。なにより1990年代初め、ベネトン社の広告写真に使われたことで知られる。広告発表当時、兵士が後ろ手に人間の大腿骨を持っているのが衝撃とされた。1990年代のベネトン社は、社会問題に心を砕く正義派企業だとアピールするためか、内戦、難民、AIDSなど、深刻な事態を捉えた報道写真による広告戦略を展開していた。企業広告が現実の報道写真を使うことで、私たちの視線に何が起こるかに関心をもった私は、当時の評論で次のような警告を発した――「ベネトン社の広告写真で世界の問題を教えられた私たちの視線は、今後どんな報道写真を見ても、どこかで見たセーター屋の広告みたいだと思うだろう」。

グローバル資本の時代に、広告写真と見分けがつかなくなった戦争映画の意味を考えても、答えは出ない。こうして私たちは、戦争の問題と直接に向きあう力を失っていく。

（2008年　98分、フランス、ベルギー、リベリア）